会員だより

人の死に方

小川忠邦

今，人の死が本当に身近に見られなくなってしまったと言われている。昔は人が死ぬ時は特にお年寄りの場合は，大抵畳の上で多くの家族に見守られて最後を迎えるのが普通であった。今は病院や施設のベッドの上で，点滴や管で繋がれたまゝ死を迎えることが多いが，それが果して本人の希望する姿であろうか。あなたはどのような死を迎えたいかというアンケートをとると，死ぬ時は苦しまずにコロッと死にたいとか，助からないと分かったらむやみに延命治療をしてほしくないとか，住み慣れた家の畳の上で死にたいとかいう答えが圧倒的に多いのである。つまり大多数の人は死に方を選択できない，自分で望む死に方をしていないということになる。何故このように現実とのギャップが大きいのであろうか。その一つは医療とのかかわり合いである。人が死ぬ時は必ずといっていいほど医療がかかわってくる。今の医療は延命第一主義で，それは本人の意志や尊厳とは無関係に徹底的に行われる。無意味な治療と分かっていても手を抜くことは許されない風潮があるのはやりきれない。もう一つは核家族化である。年をとって自分の力で生きることができなくなった時に面倒をみてくれる家族がなく，行きつく先は施設であり，ホームであり病院で，静かに自宅で死を迎えるといった環境がそもそもないのである。その他，人の生や死に対する考え方や価値観の変化など，自分で死に方を決められないといった状況になっていると思われる。

今私のいる病院のある地域はお年寄りが多く，現代の高齢化社会のまさに典型である。自分で生きる能力を失った老人をむりやり経管栄養で活かされたりしているのを見ると，本人の尊厳は一体どうなっているのかと思う。痴呆になると手に負えなくなり，結局家族から見放されてどこかに収容され，垂れ流しのまつ十把ひとからげにされて集団生活を余儀なくされる。これが現代日本の高齢化社会の行きつく先の実体なのである。

どんなに高齢になってもどんなに体が不自由になっても，一人一人は個性と人格をもって生きてきた人間のはずである。その人生の終末をこんな状態で迎えてよいのかと思う。人の死が宿命である以上，せめて自分の意志で，自分にふさわしい死に方ができないものかとつくづく思うこの頃である。